第１０回目

＊倫理学特講＊＊＊＊ S.Ashina

＜前回＞

・創造：言語行為→存在→善（存在意味・固有の価値）

神の絶対的活動性

神の目から見て無意味なものなど一つもない

神の判断に逆らって存在意味がないなどど言ってはならない

障害においても、老いの中においてもなおも、「にもかかわらず」意味がある・価値がある（存在の尊厳）

存在への畏敬（ヘルムート・Ｒ・ニーバー）

・人間性と「神の像」、善性、社会性

１０　キリスト教的人間理解―その光と影―

１０―１　罪の問題

1. 創造の善性、では悪はどこから？
2. エデン神話

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創世記２：１６）

3. エデン神話に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？

その場合の人間の責任とは？

↓

・旧約聖書の現実主義：性善説と性悪説の間の現実

・神話という語り方の意義（言語的文学的機能）

解釈の多様性を残しつつ、解釈を促す（リクールの悪のシンボリズムの研究）

・ヘビ：善悪二元論

女：身体・欲望＝悪

男：自由意志論

神：神義論

4. エデン神話の背景と解釈

・Ｊ文書：歴史的人間の現実性への洞察（人間論）

・ユダヤ教における罪論の基本テキストではない

アダムは、人あるいは男？

・「堕罪→原罪」というキリスト教的罪論における解釈

パウロ→アウグスティヌス

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」（ローマ 5:12）。

１０―２　人間存在の両義性

5. 聖書の人間理解：リアリズム

性善説でも性悪説でもなく、人間における善と罪との両義性

6. 罪の根源性、そして関係の歪みとしての罪　→　　罪の連帯性

・「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」（ローマ７．１９）

・他者の犠牲において存在している人間

生きるという罪、正しい忠告にあえて逆らう心の傾向

・自己関係・他者関係・神関係の三つの関係における歪みの相関性

・知らないことにおける連帯責任

7. 罪の結果を被った側の視点から

・恨（ハン）の神学

・宗教的救いと恨の関係

ハンは晴れるのか

赦し得ない罪？

＜ブックガイド＞

１．キルケゴール　『死に至る病』（岩波文庫）

２．関根清三　『旧約における超越と象徴』（東京大学出版会）

『旧約聖書の思想　２４の断章』（岩波書店）

３．並木浩一　『旧約聖書における文化と人間』（教文館）

４．森本あんり　『アジア神学講義』（創文社）

第１章　アンドルー・パク

「罪」の補完概念としての「恨」